

日本映像学会メディアアート研究会企画 ー映像とメディアアート展ー

移動と身体ー知覚する表現へ

日時：2023年9月15日（金）ー10月1日（日）

金・土・日曜・祝日開館 12:00ー17:00

場所：愛知県立芸術大学芸術資料館 入場無料

展示作家：

DTG [大泉 和文（中京大学工学部）＋加藤 良将（名古屋芸術大学）]

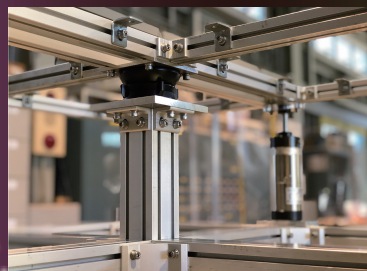
鈴木 浩之（金沢美術工芸大学）＋大木 真人（JAXA 地球観測研究センター）

森 真弓（愛知県立芸術大学）

関口 敦仁（愛知県立芸術大学）



鈴木浩之＋大木真人《Kanazawa Meteor 2023》より



DTG《VC 1.0》より作品部分

芸術講座／日本映像学会メディアアート研究会

「AIと映像表現」

講演：秋庭史典（名古屋大学大学院情報学研究科教授）

日時：2023年9月30日（土）14:00～16:00（質疑応答時間含む）

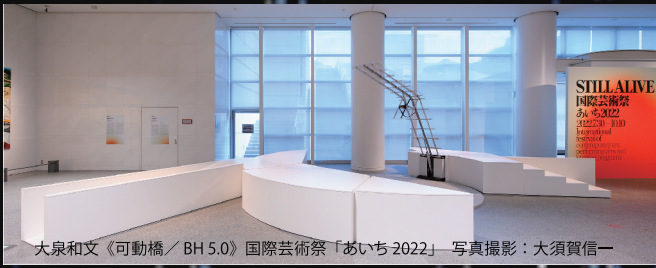
場所：愛知県立芸術大学芸術資料館演習室 入場無料

芸術講座問い合わせ先：芸術情報・広報課 TEL. 0561-76-2873（平日 9:00 ～ 17:30）



秋庭史典（あきば ふみのり）

1966 年、岡山市生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了(美学美術史学)。博士(文学)。名古屋大学大学院情報学研究科教授。専門は美学。現在は、未来社会における幸せとは何か、そのために美学や芸術学は何ができるかという視点から研究を行っている。
2018 - 2020 年度、文化庁メディア芸術祭アート部門審査員



大泉和文《可動橋／BH 5.0》国際芸術祭「あいち2022」写真撮影：大須賀信一

DTG 大泉和文（中京大学工学部）と加藤良将（名古屋芸術大学）が2018 年に結成。Maker Fair Ogaki 2018、Campus Exhibition ARS ELECTRONICA Festival 2019 など発表。

大泉和文（おおいずみ かずふみ）

1993 年、筑波大学大学院修士課程芸術研究科修了、博士（メディア科学）。ドローイング・マシンなど大規模なインタラクティブ・インスタレーション作品を制作し、個展（Standing Pine, 2020 年）、国際芸術祭「あいち 2022」、神戸ビエンナーレ 2007 など発表してきた。これらの作品は、物体が動くリアリズムの体現と物理的な身体性を意図している。同時に「アート＆テクノロジー」の観点でしか語られない狭義のメディア・アートに疑問を呈し、現代美術の一領域としての位置づけを目指している。

加藤良将（かとう よしまさ）

2006 年、中京大学大学院修士課程情報科学研究科修了、修士（メディア科学）。電子デバイスとプログラミングを用いたインタラクティブ作品を制作している。流体の不思議な現象を用いた作品「White Lives on Speaker」にて Ars electronica Prix Ars 2007 Honorary mention を受賞。また、LED と光ファイバーを用いた「Rokuro」シリーズを様々な展覧会にて発表している。



愛知県立芸術大学 愛知県長久手市岩作三ヶ峯 1-114

「映像とメディアアート展」問い合わせ：芸術資料館 TEL. 0561-76-4698

交通案内：

●名古屋方面から
地下鉄東山線
「藤が丘」駅下車
東部丘陵線（リニモ）
「芸大通」駅
下車徒歩約 10 分

●豊田・瀬戸方面から
愛知環状鉄道
「八草」駅下車
東部丘陵線（リニモ）
「芸大通」駅
下車徒歩約 10 分



鈴木浩之+大木真人（すずき ひろし+おおき まさと）

「だいちの星座」は、鈴木浩之・大木真人らが、KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭など国内各地や韓国・モンゴルなど国外でも展開中のアートプロジェクトで、現地の参加者らと共に制作・配置するハンドメイド電波反射器や宇宙航空研究開発機構（JAXA）が運用する陸域観測技術衛星「だいち2号」を用い多数の地上絵を描いている。2022 年より地上絵アニメーションの制作に取り組んでいる。

鈴木浩之（すずき ひろし）

金沢美術工芸大学美術工芸学部美術科油画専攻・同大学院絵画専攻映像コース 教授
1972 年生まれ、ミラノ国立美術学院ブレラへの留学を経て 2004 年に帰国後、2010 年に文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業の採択を受け、地球観測衛星を利用して地上に「星空」を描くプロジェクトを開始。専門は絵画、映像。



大木真人（おおき まさと）

JAXA 地球観測研究センター 主任研究開発員 1982 年生まれ、リモートセンシング技術およびそれらの教育や芸術などへの応用について研究を行っている。



森真弓（もり まゆみ）

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。ヒト、モノ、場所、時間などの間に存在する「接点」を表出させることをテーマに、光、音、映像によるインスタレーション作品の制作、各種インターフェースデザイン、コミュニケーションデザイン、イベントプランニングなどを行う。近年は、パーカッションスト深町浩司と共に、音を「知覚」することの意味から社会を考える「共鳴〜 Kyo-meï」プロジェクトを立ち上げ、活動している。



関口敦仁（せきぐち あつひと）

美術作家、メディア映像専攻特任教授。メディアインスタレーションを中心とした作家活動を行う。「Connected Re-Body」、「景観シリーズ」、「ArmExistance シリーズ」「仮想内観」など、自己の身体知覚と場所性をテーマにした作品の発表や地理情報を活用した歴史情報コンテンツの研究などを行っている。Campus Exhibition ARS ELECTRONICA Festival 2019 で企画・発表。

